

校友会長就任にあたって

加納陸人

この度、本年1月に逝去された吉田隆司前校友会長の後任として、会長職を任命されました。微力ではありますが、皆様のご助言とご支援をいただきながら、職責を果たしていく所存です。

私は1971年に学院の一般講座で中村俊也先生から中国語を学びました。その年に授業料値上げ問題が持ち上がり、学院の存在意義、中国語教育の目的などをめぐって論戦が交わされ、倉石学院長が病を押して対応されていました。経営状態も悪化し、一人でも多く学生を確保しようと高島平団地や御茶ノ水駅頭に何度も足を運び、学院のビラを撒いたのが忘れられません。

その後、中国の大学に日本語専門家として赴任、帰国後、1986年に日本語科の設立にかかりました。1990年代初頭に学院を離れ、大学で日本語教員養成の仕事に携わり、3年前に定年退職をしました。

校友会は学院が35周年を迎えた年(1986年)に「会員相互の親睦交流を深める」、「日中学院を賛助し、日中友好のかけはしとして中国語及び中国文化等の研究・普及活動に寄与する」ことを目的に設置されました。そこには倉石中国語講習会時代から脈々と築かれてきた「日中友好のかけ橋」をさらに堅固にするという意志が込められています。

校友会のこれまでの主な活動として、中国旅行、講演会活動、日本語科の留学生とのバスハイク、文化祭でのピースリーディング・おにぎり屋の出店などが挙げられます。しかし、この2年間は新型コロナ感染拡大の影響で見送られてきました。

今もコロナ禍が続いておりますが、このような状況でも後ろ向きにならず、前向きに時代を切り開いていくことが大切です。今年度の新規の活動として、倉石先生が講義された音源、学院70年の歴史的な写真のデジタル化を考えております。古い写真は劣化が進み、後世に貴重な財産を残すためにもデジタル化が急がれます。

今年は日中国交正常化50周年を迎えますが、従来のような往来ができないこともあり、今一つ盛り上がりには欠けているようにみえます。また、コロナやロシアによるウクライナ侵攻などで世界が変化し、社会が閉塞状況にあります。このような中で、何よりも学院や校友会員が「元気になる」ことが望まれます。そのためにも皆様の世代を超えた貴重なご意見に耳を傾け、共に歩んでいけたらと考えます。

今後とも校友会活動のご理解とご協力をお願いいたします。

2022年7月27日